ゲオルク・ヴュルフェルとその文庫について

Georg Würfel and his Book-Collection in Tohoku University Library

小川　知幸

はじめに　introduction

東北大学附属図書館本館所蔵の個人文庫にヴュルフェル文庫と称される一群の図書がある。2016 年（平成 28）にその遡及入力が終了し，現在は全 1,160 冊が，準貴重図書として運用されている。（図 1）附属図書館のホームページでは，つぎのように紹介されている [1]。

> 旧制第二高等学校で 30 年近くドイツ語教師を務めた Georg Würfel（1880－1936）の旧蔵書。ヴュルフェルはドイツの Zerbst に生まれ，テュービンゲン，ベルリン，ハレ，マールブルクの諸大学で神学・哲学を学んだ後，1905 年（明治 38）ドイツ伝道協会の宣教師として東京小石川の神学校勤務を命ぜられ，翌年初めて来日した。早稲田大学等でドイツ語を教えるなどして，1908 年（明治 41）に二高に着任，厳格かつ熱心な授業で知られた。答案に少しでもミスがあると「フュンフマール（5 回）」を命ぜられ，完全に直るまで 5 回ずつ書き直しをさせるのがつねであったという。いっぽうで愛国心が強く，また第二の故郷である仙台の自然をこよなく愛した。1936 年（昭和 11）1 月 18 日朝 8 時 20 分ころ，いつものように講義をしている最中に突然倒れ，そのまま心臓麻痺で逝去した。

この紹介には出典の記載がないが，この文章をもとにした英訳も同じサイトに掲載されており [2]，またドイツ日本研究所（DIJ: Deutsches Institut für Japanstudien）のホームページにおいても，「日本の大学所蔵特殊コレクション」としてそのドイツ語訳が掲載されているので [3]，この紹介文がウェブ上で知ることのできるヴュルフェル文庫のおそらくもっとも上流に位置する情報源になっているとおもわれる。

管見の限り，この文庫の旧蔵者であったゲオルク・ヴュルフェルについて論じた研究文献はこれまでのところ存在しない。またヴュルフェル自身によって著されたものも，手稿はもちろんのこと，活字化されたものさえ，一部の弔辞等を除いては見当たらない [4]。したがって，旧制第二高等学校（二高）に残されたかれの

図 1　ヴュルフェル文庫

1　http://www.library.tohoku.ac.jp/collection/collection/introduce.html
（「27．ヴュルフェル文庫」。ただし一部の誤字と表現を修正した）

2　http://www.library.tohoku.ac.jp/en/collections/major_special_introduction.html#wurfel

3　http://tksosa.dijtokyo.org/?page=collection_detail.php&p_id=476

4　Gedenkrede zur Trauerfeier für Herrn Paul Schmidt (am 27. Dezember 1935, 11. Uhr) aus dem Nachlaß des Herrn Prof. G. Würfel『尚志会雑誌』（第二高等学校尚志会）第 162 号，1936（昭和 11）年，77－83 頁。もう一つの「弔辞」としてラファエル・フォン・ケーベルに対するものがあるが，それについては後述する。

雇用関係をしめす公文書と[5]，生前その周囲にいた人びとによって編まれた追悼集などからその人物像を描きだすよりほかないのである。前記の紹介文では，ヴュルフェルは「厳格かつ熱心な授業で知られた」とあり，その根拠として「答案に少しでもミスがあると『フュンフマール』を命ぜられ」たとしている。しかし，ヴュルフェルの当時の教え子からは，「教壇の先生，それは厳正とか峻切とかいう形容詞が当たっていたようにも思う。しかし……あの峻厳さの間に，ときどきあらわれた humoristisch な性格，ぼくはあれこそ見逃せない先生の性格だと思う」との証言もある[6]。フモリスティッシュとは，おどけたとかユーモアのあるとか快活なとかいう意味である。ヴュルフェルは，決して厳しいだけではない，多面的な性格の持ち主であったということ，そしてそれは限られた近親者だけでなく，教室の生徒たちにも十分に認知されていたことを推測させる証言である。ただし，ヴュルフェルの教室での態度を表すために，厳格よりもさらに鋭い厳しさをしめす「峻厳」という言葉をつかっていることにも留意すべきであろう。

いずれにせよ，前記の文庫紹介には，人間的な肉付けがなく一面的であり，文庫の性格や成り立ちについても得られるところが少ない。とはいえ，ヴュルフェル自身の著作に頼ることができない以上，なるべく多くの証言をあつめるより手立てはない。本稿は，そうした手段をつうじて，ゲオルク・ヴュルフェルのよりくわしい経歴をあきらかにしながら，その人物像をできるだけ掘り下げ，ヴュルフェルの遺した文庫の性格を見極めることを課題とする。

1. ヴュルフェルの経歴と人物　biography
（1）仙台赴任まで　background

ゲオルク・ヴュルフェルは，明治 13 年に当たる 1880 年 9 月 14 日，アンハルト公国（Herzogtum Anhalt）のツェルプスト（Zerbst）という町に生まれた[7]。ツェルプストは北ドイツ，エルベ川付近に位置し，現在でこそ人口 2 万人余りの小都市の地位にあまんじているが，かつて 17・18 世紀には，アンハルト＝ツェルプスト候の宮廷がおかれた城下町であり，ロシアの女帝エカチェリーナがその幼少期を過ごした町でもあった。ヴュルフェルの生まれたころは全国に先んじて，馬車による鉄道運行が始まっていたという。周りをプロイセン王国に囲まれたアンハルト公国は，当時北ドイツ連邦への加盟をへて，ビスマルク率いるドイツ帝国の構成国の一つとなっていた。

両親やかれの幼少期についてはよくわかっていない。「父はビスマルクの参謀官であったといわれ」ているという証言もあるが[8]，あくまでうわさ話の域を出ない。確かなことは，少なくとも一人の弟がいたということである[9]。

1899 年（明治 32）の春にギムナジウムを卒業し，テュービンゲン，ベルリン，ハレ，マールブルクの各大学で神学と哲学を学び，1902 年に神学国家試験の第一次試験に，1905 年には第二次試験に合格した。この一次試験は大学卒業後，そして二次試験は副牧師の任期の終わりにその受験資格を認められるものであり，これによりヴュルフェルは晴れて牧師の資格を得るにいたった。学生時代には神学・哲学だけでなく，歴史理論や倫理・美学，教育，現代社会や自然科学の講義にも出席し，また数週間の教育実習も受けたという。とくにその間，ワルデック＝ピルモント候国（Fürstentum Waldeck-Pylmont）の公子カール・アレクサンダー（Carl Alexander）の家庭教師をつとめ，エリート教育にかかわったことは，ヴュルフェルが成績の優秀さのみならず，教育者としても認められていたということの証左であろう。

1905 年に普及福音新教伝道会（Allgemeiner Evangelisch-Protestantischer Missionsverein）の宣教師として[10]，東京

5　第二高等学校外国人教師契約書（二高 /06：マイクロフィルム）東北大学史料館所蔵
6　山田茂「Würfel 先生を想ふ」『尚志会雑誌』（第二高等学校尚志会）第 162 号，1936（昭和 11）年，69－70 頁。本文中での旧字体，旧仮名遣い等は改めた。
7　以降の記述は基本的に，上掲，外国人教師契約書に収録された自筆の履歴書（Lebenslauf）による。
8　中山善雄・江藤武人編『天は東北山高く』（旧制高等学校物語　二高編）財界評論社，1966 年，80 頁
9　小池秋草『紅毛人交游帖』章華社, 1936 年, 188 頁。筆者（小川）は，旧蔵書の調査からおそらく 2 人の弟がいたと推測している。後述。

小石川富坂（現・文京区小石川 2 丁目）の新教神学校勤務を命ぜられ，翌 1906 年（明治 39）4 月，27 歳のときに初来日した。このときのヴュルフェルのようすを，のちに東北帝国大学医科大学教授となり，当時東京帝国大学医科大学 4 年生であった熊谷岱藏は，つぎのように語っている [11]。少し長いが引用する。

そのとき，後には剃ってしまわれたので仙台での知人は多く知らないであろうが，口髭と濃い顎髭を生やして，ガウンを服し厳めしい様子をしておられ四，五十代の年配の人のように思われた。がウュルフェルさんはおそらく二十六, 七歳の若さであったろう。内容は，今は皆忘れて覚えておらぬが，なかなか雄弁に説教しておったと記憶する。そしてキリスト教としても非常に進歩した教義に立脚したものであったであろうかと思われる。あるいはすでに伝統的のキリスト教教義から飛び出しておったかもしれない。数年前ウュルフェルさんにこのことを話したところ，あるとき説教しての帰途，ドイツ人の某君が，あれがキリスト教かと非難的に問われたことがあったと語られたことがある。

ヴュルフェルの宣教師としての任期は，公式には 1906 年から 1908 年（明治 41）までの 2 年間となっているが，じっさいには神学校での教職は長くは続かなかったようだ。後に同僚となる小池堅治（秋草）は,「上官と衝突したのを機」に,「教会から足を洗っ」たとしているが, その真偽は定かでない。が, すでに 1907 年(明治 40）10 月からは，早稲田大学法科のドイツ語教師をつとめている。そして翌 1908 年 9 月 1 日より，活動の舞台を東京から仙台へと移し，第二高等学校にドイツ語およびラテン語の教師として着任した [12]。

それまで第二高等学校では，前任者としてアウグスト・デーゲンハルト（August Degenhart）という人物がドイツ語を教えていたが，任期切れを待たずして前年の 6 月 30 日には離職していた [13]。わずか 1 年の在職期間であった。それにたいしてヴュルフェルは, 1936 年(昭和 11）に亡くなるまでの 28 年余りを，仙台を「第二の故郷」として過ごすことになった [14]。(図 2)

図 2　自宅前のヴュルフェル，1926 年頃（東北大学史料館所蔵）

ヴュルフェルの月俸は 300 円，そのほかに住居費として 20 円が支給された [15]。同じころ東京朝日新聞社に入社した夏目漱石の月俸が 200 円であったことを考えると，相当な金額であったといえる。米ケ袋上丁（現在の中坂通りの辺り）に家を借り [16]，独身のうちは食事の準備のために下男を一人雇って，畳の上に座り米飯と惣菜を常食とした [17]。当時二高は片平丁にあったから（片平校舎，1924 年（大正 13）まで)，自宅からは徒歩で十分に通える距離であった。食後はかかさず犬を

10　下記のサイトには当時の宣教師のリストが掲載されている。
http://www.doam.org/index.php/ueber-uns/mitarbeiter/834-mitarbeiter-in-japan-1884-1946
11　熊谷岱藏「ウュルフェルさんの憶ひ出」上掲『尚志会雑誌』，30 頁
12　「條約書」。上掲，外国人教師契約書には，最初に交わされたと推測される契約書は残されておらず，その翌年の更新時に，さらに 3 年間の期限を設けた契約書が収録されている(1909 年(明治 42)6 月 1 日の日付で, 第 4 代校長中川元と締結)。この 3 年契約と更新は，1933 年（昭和 8）まで途切れることなく続いており，その後 1 年更新となって没年の 1936 年（昭和 11）にいたる。
13　上掲，外国人教師契約書
14　H. Vogt による弔辞に表された表現。上掲『尚志会雑誌』，27－28 頁
15　「條約書」上掲，外国人契約書。1920 年（大正 9）には月俸 450 円，住居費 45 円に昇給した。
16　明治･大正期の仙台市旧町名は, 仙台市史編さん委員会編『仙台市史』(通史編 6:近代 1), 2008 年, 同（近代 2), 2009 年の「参考地図」（それぞれ 480 頁，544 頁に収載）により確認。米ケ袋上丁は上町とも。
17　小池秋草，上掲書，182 頁

連れて向山から大年寺辺りまでを散歩し，あるときは北三番丁でも犬を散歩させる姿を生徒に目撃されている[18]。台ノ原の景色をとくに好み，それどころか健脚でならしたヴュルフェルは，休日には郊外の秋保や太白山，七北田などにまで足を伸ばしたという。

ちなみに，ヴュルフェル（Würfel）とはドイツ語でサイコロを意味する言葉でもあるが，それにちなんで賽の目の紋のついた半纏をこしらえてみたり，紋付き袴姿で床の間を背景に写真を撮らせてみたりして，日本贔屓のユーモラスな側面もあったらしい[19]。

（2）フュンフマール　Fünfmal

さて，ヴュルフェルの二高での授業の厳しさを表す上記の「フュンフマール」であるが，ヴュルフェルの同僚であり，1907 年（明治 40）から 1950 年（昭和 25）まで長く同校で教鞭を執った上記の小池堅治は[20]，つぎのように説明している[21]。

> 「フュンフマール」とは「五回」ということで，先生は毎日の生徒の答案を調べ一個半個の誤りでもある文章はその全部を次回までに五回書かせるのである。つまり不注意を繰り返させないための重刑法である。一センテンスを完全に書く生徒は五指を屈するくらいの少数であるから，仮に五センテンスからなる課題とみても次回には二十五回書き直す必要が生ずる。前のよりもかえって出来が悪ければ，第三回目には三十回も書かねばならない。……その結果，答案の放棄となり，時間欠席となる。

さらに小池は，「二高のドイツ語を第一外国語とした卒業生は『フュンフマール』の先生といえば慄然として肌に粟を生ずるものが少なくないであろう」といって，一種の強迫観念になっていたとしている。このような厳しい学習課題は，じっさい生徒にとってかなりの重圧になっていたようで，その重圧に屈し，単位を落とせば留年につながりかねないような死活問題でもあっただろう。これにたいして，おそらく 1918 年（大正 7）ころに，のちにジャーナリストで労働運動家となる，当時二高生であった鈴木東民（1895－1979）が主導して，「フュンフマール」撤回を求めた抗議運動さえ起こったという。小池によれば，危うく全校ストライキにまで発展するところであったらしいが，この表現自体にはいくらか誇張が含まれているかもしれない。

教え子たちも，「非常に真面目で，熱心で勤勉で，ちょっとでもいいかげんなことのできぬ几帳面の方でした」とか[22]，「先生は……精悍なる青年紳士で，授業ぶり等も非常に厳格でありました」とか[23]，「教授法は細密をきわめ，意志的であり，やや峻厳に傾いていた」とか[24]，異口同音にヴュルフェルの授業の厳しさを述懐している。以下引用する。

> それから，先生の Fünfmal です。これは会話に劣らず私たちにとってつらいものでした。二学期三学期になってこそ，消しゴムやナイフで削った跡があっても，冗談など言われて大目に見てくださったが，一学期は点一つの打ち方にも注意を払ったものでした。消しゴムやナイフを使うほど図々しくもなかったし，またそんなものを使えば，必ず返されたに相違ありません[25]。

しかしながら，冒頭でも触れたように，生徒にとって大きな緊張を強いられる側面ばかりではなかった。たとえば，「平野［孝一］先生が，『初めから終わりまで真面目に話をし通すことのできない人でした』とおっしゃっていたが，まったくその通りで，厳粛な顔で何か言っているかと思うと次の瞬間，痛烈な冗談を言っ

18　上掲『尚志会雑誌』，59 頁
19　小池秋草，上掲書，183－184 頁。紋付き袴姿のヴュルフェルの写真もこの書籍の口絵に掲載されている。13 頁参照。
20　倉田潮編『二高名簿』二高尚志社，1956 年
21　小池秋草，上掲書，179－180 頁
22　相川勝六「ウュルフェル先生の想出」，上掲『尚志会雑誌』，34 頁。相川勝六（1891－1973）は官僚・政治家。1912 年（大正元）に二高に入学した。
23　桂重鴻「ウュルフェル先生の思ひ出」，上掲『尚志会雑誌』，41 頁
24　小宮曠三「ウュルフェル先生を憶ふ」，上掲『尚志会雑誌』，62 頁
25　伊藤實也「地下の Würfel 先生に捧ぐ」，上掲『尚志会雑誌』，66 頁

て生徒を哄笑させた。まったく陽気な『面白い人』であった」などという証言である[26]。

とにかく先生の冗談はいつも私たちを引きつけました。私たちの間違った答えをとらえて，ひょっと言われる洒落や，犬の鳴き真似，子どものあやし方，それから興が乗ると……ダンスでさえ踊らんばかりになられたこともありました[27]。

そのほか，生徒の机の間を歩き回って，帳面の誤りをペン先の広がった赤インクの万年筆でギザギザと訂正されること。これが終わって教壇に大股で戻られ，両目を二, 三度パチパチさせて，“Nun!”と言われて新教材に移られるあざやかな講義ぶり。郷里のことを言われるときの潤んだような眼差し。廊下を両手を振っての活発な歩調，生徒への返礼には右側へ頭を曲げて，懐かしさのこぼれるような会釈。顎を引いて顔を赤らめて，クックックッという息苦しそうな笑い。すべて眼前に彷彿たる諸相である[28]。

推測するに，一学期にはいっさいの妥協を許さぬ厳格な授業により生徒をドイツ語に集中させ，二学期以降には，ドイツ語の世界の豊かさ，表現することの楽しさなどをそこに付け加えていったのだろう。そもそも外国人と会話する機会も限られていた当時の高校生は，初めて遭遇した西洋人，授業中ほとんどドイツ語しか話さず，しかも眼光鋭い教師の姿に臆し，単純な質問の返答にさえ窮してしまう。その恐怖心と羞恥心とが「フュンフマール」のヴュルフェルの姿へと結晶していったのではないか。また，のちに『独和辞典』に名を残すことになるドイツ文学者の木村謹治（1889－1948）は，こう述べている[29]。

ウュルフェル先生の何一つおろそかにせぬ精確さは何人も熟知しているところでありますが，論文の訂正等お願いしますと，何回でも疑問符を付してよこされ，こちらで怠けていますと，ついには自ら研究室へ出かけてきて，先生もこちらも納得のゆくまで文章を改削してくださるのがつねでした。

フュンフマールは，そのような，言語に対する誠実さ，執念深さをあらわす，複合的なイメージの象徴であったともいえるだろう。

（3）交流　Umgang

さて，「フュンフマール」は，ヴュルフェルの異名であった。だが，ヴュルフェルはそれ以外のあだ名でも呼ばれており，（おそらく発音のしやすさから）「ウェルフェル」や，後年には「ウュル公」などとも呼ばれていた。とくにウュル公は，小池によれば，「フュンフマールも撤回された」後の一般の呼び名であったという[30]。このあだ名をしかしヴュルフェルは，volkstümlichだといって喜んだという。フォルクステュームリヒとは，庶民的とか国民（民族）性に合致した，という意味である。また，あるとき（明善寮の記念祭に）「伯林定九郎」として似顔絵を貼りだされ，皆が色を失っているさなか，歌舞伎の「仮名手本忠臣蔵」のヒーローだとの生徒たちの説明に（斧定九郎か），これをたいせつそうにして自宅に持ち帰ったという[31]。騙された振りをしたのだろうか。それとも歌舞伎俳優の看板のように描かれた肖像画を本当に気に入ったのだろうか。いずれにせよ, このようなエピソードも, また「ウュル公」という異名も，生徒との信頼関係をしめすものに違いない。

一部の生徒たちはヴュルフェルの自宅を訪問し，日本文化にかんする四方山話にふけったり，あるいはいっしょに縁日やボート漕ぎのレクリエーションに出かけ

26　和田久「ウュルフェル先生を憶ふ」，上掲『尚志会雑誌』，71 頁。平野孝一は 1928（昭和 3）から 1949 年（昭和 24）まで二高教授をつとめ，ドイツ語を教えた。その後早稲田大学文学部教授として転出。上掲『二高名簿』参照。
27　伊藤實也，上掲書，66 頁
28　古川清彦「ゲオルグ・ウュルフェル先生を偲ぶ」，上掲書，74 頁
29　木村謹治「ウュルフェル先生の追憶」，上掲書，39 頁
30　小池，上掲書，183 頁。小池は 1929 年（昭和 4）における文部大臣小橋一太による二高視察を「フュンフマール参観」としている。ヴュルフェルが 48 歳のときである。おそらくそのころまではこの異名が続き，それ以後，「ウュル公」へと変遷したのであろう。
31　小池，上掲書，182－183 頁

たりした[32]。

先生はお祭りの屋台店で菓子を一袋買われて自ら大道闊歩しながら頬張られ，われわれにも薦められた。さすが田舎者のわれわれでも往来で食い歩くには慣らされてはいなかったため，かなりたじたじの体であったことを思い出す。……あるとき塩釜にボートを漕ぎに誘ったが，先生はボートにはあまり経験がおありのようにも見えなかったけれども，敢然としてオールを握って力漕せられた。……先生はたちまち素っ裸になって漕ぐ手をやめない。自分は生まれて初めて西洋人の裸を見た。そしてその白皙の美に物珍しげに見入ったことを覚えている。

旧制高校生のエートスさえ感じさせる一文である。

また，同僚たちとは馬術や弓術，射撃，冬にはスケートなどを楽しんだようである。器械体操や棒高跳びにも興じ，とくに逆立ちが得意だったという[33]。教え子であった木村は，「若いころの先生はじつにこうした天空海闊の野人であった」と打ち明け，ヴュルフェルのなかに潜在するそうした野性が，日本人が本来もつ楽天的な気分や，とりわけ東北人の素朴なこころと相通じ，そのたましいを離さなかったのではないか，と推測している。

その反面，「ときどき人と衝突して絶交状態になることがあった」[34]。熊谷岱藏によれば，当時東北帝国大学医科大学教授であったかれは，ヴュルフェル宅に何度か往診したことがあり，ヴュルフェルがその礼金を留守中に持参したが，帰宅後それに手紙をつけて返したことがあったという。かれのそのころの経済的状況を慮ってのことであった。ところがヴュルフェルは激高して再訪し，「僕はこれを払う義務があり，君はそれを取る権利と義務があるといって真っ赤な顔に青筋を立て，口角泡を飛ばしてなかなか承知しない。ついにプンプン怒って帰られた」。この一件は，数日後に解決案を見いだしたというヴュルフェルの来訪により，ともかくも落着することになった。「これを今，日本に来ている憐れなドイツの捕虜の慰問に送ってはどうだ」と。したがって，第一次大戦にかかわる 1916 年（大正 5）から 1920 年（大正 9）までの時期のことであろうと推測される。

要するにヴュルフェルは，自分の「正義」を決して譲れぬ性格であった。それはいかなる環境にあっても不変であった。そのため近づきがたいものとしてヴュルフェルを遠ざけた人びともあったとおもわれるが，絶交状態にあった者たちの証言は往々にして得られない。後述するが，前半生において重要であった教会との関係も，ヴュルフェルはおそらく完全に断ち切ってしまったのである。

ところで，来日してからのヴュルフェルは，けっきょく一度も故郷に帰らなかったとする言説がある。しかし，かれは 1912 年（大正元），31 歳のときにドイツに一時帰国したようである[35]。結婚のためであった。

妻となったのはドイツ人女性であった。彼女はしかし再婚であり，数学教授であった前の夫とは協議離婚にいたったようである。詳細は不明ながら，年齢はおそらくヴュルフェルとほぼ同じくらいであったとおもわれる[36]。あるいは，ヴュルフェルとはすでに若いころに知り合っていたのかもしれない。かれは女性を日本に，仙台に連れ帰った。妻は異国の空に新天地を見つけ，たがいに資金を出しあい，新しい家を建てて夫婦の暮らしをはじめた[37]。

女性には，前の夫とのあいだにキーツ（Kiez）という名前の，16 歳になる娘がいた[38]。当初，娘は父のもとにとどまったが，おそらく 1 年もしないうちに，母のところで暮らすことを決意し，一人で海を渡ってきたという。突如 3 人での家庭生活がはじまった。しかしながら，どれほどヴュルフェルがこの娘を可愛がり，

32　木村謹治，上掲書，37 頁
33　小池，上掲書，182 頁
34　熊谷岱藏，上掲書，30－31 頁
35　桂重鴻，上掲書，41 頁。桂重鴻（かつら しげひろ，1895－1989）は内科医で台北帝国大学や熊本医科大学，新潟医大の教授を歴任した。桂は大正元年に二高に入学しているが，入学当時ヴュルフェルは一時帰国のため不在で，10 月半ばより授業が再開されたとしている。いっぽうで相川勝六は，「1916 年と思いますが，伯林のある停車場で奥様と御一緒のところにひょっこりお逢いしました。何でも初めての帰国とききました」と述べているが，時期を考慮すると，このときドイツは戦争中であり，渡航そのものが困難ではなかったかとおもわれる。したがって 1916 年は記憶違いで，桂の証言を勘案すれば開戦前の 1912 年にベルリンに滞在していたヴュルフェルに遭遇したというのが真相であろう。相川，上掲書，34 頁。また，開戦直後のドイツ国内の切迫した状況にかんしては，小川知幸（翻訳・解題）「ローマの戦争と法について―1915 年ベルリン大学エミール・ゼッケル講演録―」『東北大学附属図書館調査研究室年報』第 3 号，2016 年，11－27 頁を参照。
36　小池「斷絃　ウュルフェル氏の愛娘を痛む」（ママ），上掲書，163－178 頁
37　小池，上掲書，189 頁

娘もかれをどれほど信頼していたかということは，残された1枚の写真によって雄弁に語られているので，ここでは多弁を要しない[39]。（図3）

当時ウュルフェルさんは夫人とその令嬢と米ケ袋上町の，自分で設計して建てた家に住まわれておって，実子ではなかったが実子以上に子どもを可愛がり，夫婦仲もうらやまれるほど円満であった[40]。

ウュルフェル氏は家庭においてはすこぶる好好爺で，よく奥さんを助けてビスケットを焼いたり，ジャムを作ったりしてわれわれにご馳走された[41]。

夫婦と親娘の仲睦まじさが伝わってくるようである。ただ，独身時代の野性味が薄れたことを同僚の小池は残念がった。「先生は奥さんを迎えられてからは，野性や変味がとれ，あまりにレファインした紳士型におさまってしまったのは惜しい気もする」[42]。ヴュルフェルは以前にも増して自宅での読書三昧となったようだが，来訪者にはすぐさま答案用紙の添削の手を休めて歓待したという。間もなくヴュルフェル夫人は周りの家庭婦人を相手にドイツ料理の講習をはじめたので[43]，それがきっかけとなって家族ぐるみの付き合いもはじまり，交友関係はいっそう広がっていった。教え子は別として，すでに何度か引用した熊谷岱藏，同じく医科大学教授であった解剖学の布施現之助，細菌学の青木薫，理科大学の窪田忠彦，眞島利行，工学部の原龍三郎などの面々が，ヴュルフェル宅に出入りするようになり，のちには，法文学部の哲学教授として来日したオイゲン・ヘリゲル（Eugen Herrigel，1884－1955）もこの列に加わった[44]。さらに，1922年（大正11）に東北帝国大学総長小川正孝の招きで来日し，1925年（大正14）まで新設の生物学教室で植物生理学・解剖学を講義したハンス・モーリッシュ（Hans Molisch，1856－1937）も，ヴュルフェルの友人の一人となった。かれは帰国後に著したIm Land der aufgehenden Sonne（「日出ずる国にて」）という回顧録のなかで，つぎのように述べている[45]。

仙台には西洋人はあまり多くなく，50人ほど宣教師がいたものの，そのほとんどはアメリカ人でした。そこで，私にとってかけがえのない存在だったのが，ドイツ産の三つ葉のシロツメクサ（Trifolium）ともいうべき，ゲオルク・ヴュルフェル教授とその感じのよい教養ある上品なご夫人，そして，ハイデルベルクから哲学教授として仙台に招かれていたオイゲ

図3　娘のキーツとヴュルフェル（小池秋草『紅毛人交游帖』より）

38　キーツのドイツ語での綴りにかんしては，東北学院大学のフリーダー・ゾンダーマン教授にその語源を含めてご意見をたまわった。それによれば，ドイツ人女性としてはめずらしい部類に属するKiezという名前は，Rehkiz，すなわちノロジカの子に由来するのではないか，とのことであった。日本語の語感に合わせれば，子鹿，または鹿の子（かのこ）といえばその愛らしさが伝わるかもしれない。

39　小池，上掲書，口絵写真「振袖娘のキーツさん」参照

40　熊谷，上掲書，30頁

41　眞島利行「ウュルフェル氏の逝去を悼む」，上掲『尚志会雑誌』，43頁

42　小池，上掲書，198頁

43　熊谷，上掲書，30頁

44　小池，上掲書，198頁参照。ヘリゲルは1924年（大正13）から1929年（昭和4）まで仙台に滞在した。なお，布施現之助については，下記サイトの小川知幸「神経解剖学の巨匠・布施現之助」を参照。
http://www.museum.tohoku.ac.jp/brain/exhibition/microscope.htm

45　Im Land der aufgehenden Sonne, Wien: Springer, 1927, p. 390.　同書は瀬野文教訳『植物学者モーリッシュの大正ニッポン観察記』草思社，2003年として邦訳されているが，該当箇所は筆者が新たに原文から訳出した。訳文として，とくにTrifoliumを瀬野氏は「三本柱」としているが，これはシロツメクサ（クローバー）の学名でもある。植物学者であったモーリッシュが3枚の小葉からなるクローバーの姿をヴュルフェルら3名に当てはめ，ささやかではあるが心のかよった温かな幸福感を表現したものと解釈した。実験助手であった相馬悌介の著書『モーリッシュ先生の思い出』には，モーリッシュは「午前中は研究もしくは講義にあて，昼食後は二時間ほど休憩。午後は広瀬川対岸の向山や瑞鳳殿付近の森林，もしくは青葉山を散策して植物採集をした」（412頁）とある。そのさいヴュルフェルの自宅に立ち寄ることもあったかもしれない。また，同じくワンデルング好きなヴュルフェルとは，たがいに一脈通じるところもあっただろう。

ン・ヘリゲルでした。この 3 人にかこまれて，私は知的好奇心にあふれた，幸福なひとときを過ごし，心のこもったもてなしを受けたのです。

そうしてモーリッシュは後ろ髪を引かれる思いで仙台をあとにしたという。

ヴュルフェルは，春や夏には花巻や軽井沢，熱海などに夫人と二人で小旅行を企てた。あまり体調のよくなかった夫人の転地療養の意味もあったようである。娘もやがて成長し，宮城女学校（現・宮城学院中学校高等学校）の音楽専攻科に進み[46]，卒業した後は助手や講師の仕事をしていたが，ドイツ・フランクフルトの実業家の長男で，当時ドイツ系商社の日本支店に赴任していたフォークトという青年に見初められ，1922 年（大正 11）に結婚した。おそらく 25 歳のころであっただろう。青年は，押し出しの立派な女性が希望であったそうである。「彼女は横浜やがて神戸の社交界の明星として孔雀の翅を広げた」[47]。年頃の娘を嫁がせて家庭内は寂しくなったが，フォークトはしばしば仙台にも足を運んでヴュルフェルを訪ねており，ヴュルフェルもかれの人柄をいたく気に入っていたようである。

最後に忘れてはならないのが，ヴュルフェルとは莫逆の交わりであったというパウル・シュミット（Paul Schmidt，1872－1935）との親交である。シュミットは明治から昭和にかけて日本に精密機械や光学・医療機器等の輸入代理店として大きな役割をはたしたシュミット商店の創業者であった（1896 年（明治 29）創業）。現在でも，ライツ社のライツカメラ（ライカ）の総代理店であったとしてその名が知られている。仙台にも知己の広かったかれは，たびたびヴュルフェル宅も訪れた。その性格は，温厚にして快活，話し上手で，日本語の会話だけでなく漢字も熱心に勉強し，はがきの宛名などはいつも漢字で描かれていたという。客を厚遇し，従業員を愛したその人柄は，ヴュルフェルをも大いに感化したのではないか，と小池は述懐している。ヴュルフェルは，シュミットのように日本語を自由に操るとまではいかなかったが，他人にたいして，しつこいほどの親切心をしめすことがあった[48]。

家に病人でもあると，毎日うるさいばかりに病状を聞かれ，何かと忠告を与えられ，お見舞いには……手製の料理をもって来てくださった。汗だくになって自転車から飛び降り，料理の湯気のもれる風呂敷包みを提げて玄関口に立つ先生の姿を眺めた者は，決して私一人ではなく，同僚知人にもたくさんあるはずだ。

このような交際を煩わしくおもう相手もいたであろうが，ひとたび友人となれば身内と他人の境目もなく，感動的な印象をあたえるほどの世話を焼いて止まない。それもまたヴュルフェルの賦質であったといえよう。

（4）死　mourn

時間を少し巻き戻すことにする。結婚してまもない 1914 年（大正 3）7 月にヨーロッパで世界大戦の戦端がひらかれたとき，ヴュルフェルは猛然として当時の三好愛吉校長に帰国の願いを申し出た。しかしこれを慰撫され，帰国自体は思いとどまったが[49]，「ドイツの勝利を最後まで確信し，日々の新聞・電報を血眼になって追求して」いたという[50]。

同僚から新聞記事を翻訳してもらい，ドイツの悪い情報は英国宣伝局の作製にしてしまい，よい情報は敵の死傷者を二, 三割増したり分捕り品を倍に勘定したりして喜んでおられた。もちろん全世界に英国の宣伝網が張りつめられていたのは公然の秘密だったから，先生のこの態度も一理はあったが，かなり激情的祖国愛がその判断力に加味されていた。

46　当時の宮城女学校は，現在の住友生命仙台中央ビル＝SS30 の敷地に所在した。
47　小池，上掲書，165，170－171 頁
48　小池「今から思へば」，上掲『尚志会雑誌』，45－47 頁
49　和田久「ウュルフェル先生を憶ふ」, 上掲書, 72 頁。和田によれば, このときヴュルフェルは「一生を二高のために尽くすと決心した」という。とすれば，もう二度とドイツに帰国することはできないと覚悟した，ということであろう。
50　小池，上掲『紅毛人交游帖』，187－188 頁

しかし，ヴュルフェルはただ祖国ドイツの戦勝戦敗に一喜一憂していたわけではなかった。俸給や貯蓄の大半を投じて軍事公債に応じたり，義捐金を送ったり，ドイツに在住する弟にオランダ経由で学資を送ったり保険金を支払ったりと，自身の，そして家族の生活を切り詰めてまで，祖国にできるかぎりの支援をしたのである。約 500 冊の蔵書もそのために売却してしまったという。こうした努力は戦後も継続し，あるとき二高を卒業した桂重鴻らに，ドイツの現状と，食事にさえ十分にありつくことのできない子どもたちの惨状を訴え，「自分の在来の貯蓄も故国の窮状を救うために送ってしまった。現在の俸給のかなりの部分もそのために費やしている」と語ったという。「諸君の力で，若干なりともかつての自分の Schüler（シューラー, 生徒）たちから義捐金を募ってくれることができるなら，自分は諸君に, 自分の Schüler たちに, そして日本の国に, いかに dankbar である（万謝する）だろう」[51] と 。上述した通り，熊谷が受け取らなかった謝礼もドイツ人捕虜の支援のために使ったということである。さらに，クリスマスには愛子（あやし）地区の山林から大量のモミの枝木を伐採させ，日本各地の捕虜収容所に寄贈したり，当時南町通りにあった仙臺座において生徒を動員し，慈善演芸会を催したりした。もちろん，ヴュルフェル自身もそこに出演したのである [52]。

しかし，そのためか財産隠匿の嫌疑をかけられ，警察に銀行の帳簿を調べられたり，探偵に見張られたりしたこともあったらしい。また，敵性外国人として，いっとき地所も家屋も政府に押収されてしまったという。ヴュルフェルは日本の官憲を信頼して，そのさいはとくに不安焦慮の念も抱かなかったが，戦後になって財産返還の雲行きが怪しくなり，ついに上京して，当時内務省次官でありのちに文部大臣となった小橋一太（1870－1939）に直訴するにいたった。そして仙台に戻ると，満足したようすで，「小橋という人はなかなかドイツ語が上手だ。よく話が判ってくれた」と同僚たちに語ったという [53]。ちなみに小池は，この小橋一太の息子がのちに二高に入学し，ヴュルフェルのフュンフマールの厳しい洗礼を受けた，とユーモラスに語っている。

第一次世界大戦中の在日ドイツ人の身性の一齣を垣間見るような受難の 4 年間であった。ただし，ヴュルフェルはこの間にも外国人教師としての職務をまっとうし，また，1914 年（大正 3）からは奏任官五等（内閣総理大臣の奏薦によって任命された高等官）に任じられており，その地位は守られていた。その約 10 年後の 1925 年（大正 14）には勅任官に命ぜられた [54]。44 歳のときであった。いうまでもなく，多くの二高生を育てあげたその業績を認められてのことであろう。

ところで，1923 年（大正 12）6 月 14 日，横浜のロシア領事館の一室で帰国する機会を待ちながら蝸牛生活を送り，ついにはたせず一人の「ドイツ人」がこの世を去った。駿河台の哲人といわれた，ラファエル・フォン・ケーベル（1848－1923）である [55]。

ヴュルフェルは 1906 年（明治 39）の来日後，数週間のうちにケーベルと相知り合うにいたった。このことは，ヴュルフェルのケーベルへの追悼文から判明する [56]。ヴュルフェルはケーベルの自宅を何度か訪れ，またケーベルもヴュルフェルの勤務する神学校で哲学を講義する機会を得たことで，たがいに行き来する関係となった。そのさい，ケーベルが体調を崩し，重篤とみられたことから，ヴュルフェルが看病に立つことになり，これをきっかけとしていっそうその交際が深まったという。幸いなことにケーベルは快復し，その後，より深く，文学や神学・哲学，聖書，歴史や歴史哲学，日本やその外国人との関係などを語り合うようになった。『ケーベル博士小品集』にあるように，ドイツを祖国とし，ドイツ語を（ギリシア語に次いで）哲学的思索や詩的表現に適し，語が豊富で完全で力があり，柔軟・強靭で表現が自在であるなどとするヴュルフェルのドイツ語完全主義は，このときのケーベルとの共鳴のなかから生まれたものかもしれない。

また，ヴュルフェルが教会との関係を断ち切った理由もこの追悼のなかに表されているといってよい。あるとき日本のとある高官が，ヴュルフェルにたいして，こう言い放ったという。「日本における基督教の拡布の

51 桂重鴻，上掲書，42 頁
52 小池，上掲書，189－190 頁。仙臺座は当時，東北最大規模を誇ったとされる劇場。
53 小池，上掲書，189 頁。また，阿刀田令造「追悼辞」，上掲『尚志会雑誌』，11 頁
54 阿刀田令造「追悼辞」，上掲書，8 頁
55 ケーベルの生涯と東北大学が所蔵するその文庫にかんしては，小川知幸「少しく無秩序のうちに秩序のある―ケーベル文庫とその保存修復について―」『東北大学附属図書館調査研究室年報』第 2 号，2014 年，13－25 頁参照。
56 ゲオルヒ・ウュルフェル「ケーベル教授の思出」『思想』第 23 号（ケーベル先生追悼号），岩波書店，1923 年，205－220 頁。これは邦訳であるが，巻末に原文も掲載されている。

最大の障害は外国宣教師である」と。

> けだし彼が日本における伝道会社（ミッション）の基督教について見たところのものは，英国的ないし米国的特徴を持っていた。しかもそれは彼らが大部分を占めていることを意味する。それはすなわち酒精と煙草との禁止のみによってすでに自ら「異教的な」「劣等な」東洋よりも優れていると考えるところの狭量な，頭の狭い基督教である。

そして，ヴュルフェルは，ケーベルにたいして，「私は遺言書のなかに，教会の代表者は私の遺骸の供をしてはならないと定め」ましたと告げたという。なぜならば，「カトリックの，歴史的なローマ・カトリックのではなくして，むしろ普遍的な，全地球と地上的時間経過の全体を包括する，見えざる教会の真誠の civitas Dei の子としても，神の国の子として」遠い旅路につきたいという希望からであった。

ケーベルは驚いたというが，しかし，じっさいにそのようにして，先んじて旅路についたのである[57]。

> 六月十八日の夕暮れ，先生の遺骨が十数名の弟子たちの手によって地に委ねられ，簡素なる十字架が白百合の花に包まれて立ち，何らの教会的儀礼も用いられず，愛弟久保君によって，……「我らとともに留まれ，時夕べに及びて日もはや暮れんとす」の一句が読み上げられ，先生の遺志にもとづいたこの式らしからぬ葬式が終わりを告げた。

ヴュルフェルはこのようにして 1923 年にケーベルを送りだした。そして自身に狭心症らしき病状が出はじめたのも，おそらくはこの頃であった[58]。

悲しむべきことに，1935 年（昭和 10）5 月には，一年半前療養のためヨーロッパに渡った娘キーツの訃報に接することになった。多発性硬化症であったという[59]。37 歳の若さであった。愛娘の突然の死に夫人は生気を失い，数年来痛風に苦しみ，また心臓を病んでいたこともあって，ヴュルフェルの心配ぶりは傍から見ても気の毒なほどであったという。木村謹治は，ヴュルフェルから，「いつでもよいから君の都合のつくときに偶然訪ねたことにして来てくれないか。そして妻に彼女の病気の心配ないことを話してやってくれないか。彼女の状態は君の Trost（トロスト，慰め，元気づけ）によって多少なりとも緩和されると思うが」といわれたと記している[60]。

同年 11 月には，畏友パウル・シュミットが商用で上海に向かう途中の船上で脳溢血を引きおこし，そのまま帰らぬ人となった。翌月 28 日に東京で葬儀が営まれ，ヴュルフェルも長い弔辞を捧げた[61]。その直前のクリスマスには，娘婿のフォークトが仙台のヴュルフェル宅を訪ない，ひさびさの家族団らんとなった。ツリーも贈り物もない，静かに物語るようなクリスマスであったという。

年が明けて 1936 年（昭和 11）1 月 3 日には，ふたたび日常の時間が流れはじめていた。北三番丁での犬の散歩途中，お屠蘇気分で闊歩していた卒業生と遭遇し，お宅にお邪魔してもいいですかとの問いに，夫人の体調がよくないからダメだと断りがてら，Jugend ist Trunkenheit ohne Wein（若さとはワインを飲まなくても酔っているようなものだな）と，ゲーテを引用し，笑いながらその場を去っていった[62]。16 日には福島高等商業学校（現・福島大学経済経営学類）での授業を終え，客のもてなしのために自宅で晩餐の準備をしたが，客が病気で急遽取りやめとなり，その晩は臨時の余興会となった。物まねのうまいヴュルフェルに，周りの者たちは笑わされどおしであったという。翌日は知人の葬儀に列席し，しばらくぶりで顔を合わせた知人，友人たちと思い出話に小さな花を咲かせた[63]。

1 月 18 日は土曜日であった。この冬は厳しく，前々日から雪が降り続いていたが，その日の朝は晴れて澄み渡っていた。そのぶん朝の空気はひときわ冷え切っていた[64]。前の晩には，「明朝晴れたら車はいらないから」と下男に伝えていた[65]。すでに 1925 年（大正 14）

57　小池「『駿台の哲人』」とウェルフェル先生の最後」，上掲『紅毛人交游帖』，214 頁。波多野精一の手記として。
58　熊谷，上掲書，32 頁
59　小池「斷絃　ウェルフェル氏の愛娘を痛む」，上掲書，175 頁。キーツの生年は不明のため，享年は推定。
60　木村，上掲書，39 頁
61　註 4 参照
62　青野忠雄，上掲書，59 頁。「西東詩集」より。
63　小池「今から思へば」，上掲『尚志会雑誌』，45－47 頁

に二高は片平の敷地を新設の東北帝国大学法文学部にゆずり，北六番丁に移っていたので（北六校舎），当時ヴュルフェルは通勤に車（人力車）を使うことが多かった。しかしその日は，従前のごとく徒歩でゆこうと，いつものように夫人に行ってくるねと告げて，米ケ袋から北六番丁までの雪深い路地を歩きだした。阿刀田令造校長はこう記している[66]。

十八日朝は夜来の雪晴れ，白皚々の風景，冬の陽に浴し，寒けれどもむしろ颯爽たる気分を振るい起こしせしむるものありたり。令夫人のいうところを聞くに，先生はこの雪景色を賞せんとし，例に似ず古長靴などを懐かしみ，それを出さしめ，徒歩にて出勤したるものにして，何ら変事の兆しを見ざりしなり。

それでもヴュルフェルはめずらしく7，8分遅刻したようである。いつもはチャイムが鳴り終わると同時に教室に入ってくる，その姿を期待していた独文科二年の生徒たちが，今日はもしかしたら休講なのかといぶかりはじめたころに，グーテン・モルゲン（おはよう），と笑みをたたえて挨拶しながら現れたヴュルフェルは[67]，教壇に登ってすぐに出席を取りはじめた。授業は，冬休みの課題としてその間に生徒たちが体験したことがらを生徒自身がドイツ語で説明するErzählung（エアツェールンク，語り聞かせ）が，新学期に入ってからあと2人だけ残していた。そこでかれは，その続きをうながし，まず一人の生徒が朗誦を始めた。

これを椅子に座りながら6，7分のあいだ聴いていたヴュルフェルは，朗誦が終わると，よく通る大きな声で満足げにSchön!（シェーン，素晴らしい）と言った。生徒が着席して教室に一瞬の静けさが訪れたとき，遅刻した2名の生徒が，前の扉と後ろの扉からひょっこりと顔を出した。これに気づいたヴュルフェルは，出席簿にそれらの生徒の名前を記入し（前の扉から入ってきたのは小宮豊隆の三男，小宮曠三であった）[68]，これに続けて，朗誦した生徒の成績を書き込もうと，立ち上がって控え帖を開いた。

その途端，ヴュルフェルの顔が紅潮したかとおもうと，つぎの瞬間にはその体が力なく崩れおちた。右頬を下にして，顔は卓上にあったが，顔面蒼白となり，眼は，つい先ほどまでの鋭い光が失われ，宙を泳いでいた。固く閉じられた唇は，苦しさを懸命に抑えようとするかのようであり，数度，体に強い震えがあった[69]。

異状に気づいた生徒たちは先生を助けようと，意識する間もなく教壇に駆け寄った。そして倒れた体を椅子の上に支え起こそうとした。が，すでに意識はなく，蒼白であった顔がまたにわかに赤みをおび，顔の上にかざした腕が微動すると唇の端から白い泡が出て，同時に小さなうなり声を発した。

この間わずか数十秒であった。間髪を入れず，医者を呼ぶために電話のある職員室に駆けだす者，また，自宅に知らせるため校外に飛び出す者もいた。多くの生徒はヴュルフェルの大きな体を支え，階下の医務室に運び，ベッドに横たえ，一部の生徒は絶えず声をかけながらその顔を見守っていた。両目は少し開いていた。他の生徒は廊下に並んで，不安と緊張と楽観の入り交じった気持ちで医者の到着を待っていた。

ある者は，脳貧血だから大丈夫だろうと言った。願望であった。不安を振り払うためにそう言ったのである[70]。まもなく校医の佐藤幸三医学博士が到着し，生徒たちは医務室から締め出された。医者はさまざまな応急処置を試みたが，しばらくして首を横に振った。

「心臓麻痺である。もう手の施しようがない」[71]。

残念ながら先生は亡くなられた，という発表が生徒のあいだに伝わった。かれらは「信じたくない」とい

64 1936年1月18日の仙台の最高気温は1.3℃，最低気温はマイナス11.5℃であった。平年よりも3.7℃低い。降水量は0.4mmであり，この日は薄曇りか，あるいは多少の風花が舞っていたかもしれない。前々日の16日の降水量は6.6mm，17日の降水量も6.8mmであったから，まとまった雪が降り積もっていたはずである。18日は二日続きの真冬日のあとで，天候は回復したが，同じ1月中でも，もっとも気温が落ち込んだ日であった。過去の気象データについては下記サイトより閲覧可能。
http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php?prec_no=50&block_no=47639

65 小池「今から思へば」上掲書，49頁では，「雪なら車は注文しない様に」といったとされているが，上記のデータから積雪は自明であったので，ヴュルフェルは，晴れたら徒歩で通勤したいと考えたと判断するのが自然であろう。

66 阿刀田令造，上掲書，12頁

67 阿刀田は，「グッドモーニング」としているが，山田茂（註6参照）はGuten Morgen!としている。阿刀田は意味をとって通じやすく英訳したのであろう。

68 小宮曠三「ウュルフェル先生を憶ふ」，上掲『尚志会雑誌』，61頁

69 この描写は阿刀田と小宮の文章をもとに構成を試みたが，二人のあいだには微妙な矛盾があり，どちらが正確ともいえない。

70 和田久，上掲『尚志会雑誌』，73頁

71 この表現は原文にはないが，「『心臓麻痺』という語が，口から口へと伝わって行くとともに，重苦しい沈黙と，暗い，空虚な感じが襲ってきて」という小宮の記述から推測した。

う気持ちで，精一杯この重い事実を受け入れまいとしていた。生徒の一部は，教室で起こった事情を聴取するために呼び集められた。その他の生徒は，もといた教室に戻り，卓上に散らばったノートや転げ落ちた万年筆，開かれたままの出席簿を見て，その主がもう戻らぬことにふたたび衝撃を受けた。

ヴュルフェルの遺体を自宅まで送り届けるため，一台の車が手配された。まだ十分に踏み固められもしない雪道を静かに進む車の後ろを，阿刀田令造校長が外套も羽織らずに付き従った。一様に沈鬱な面持ちで，生徒たちもその後に続いた[72]。遺体は自宅の客間に安置された。やがて生徒たちに帰宅がうながされ，校長も同僚たちも，1，2 名を残して校舎へと戻っていった。しばらくすると親友の布施現之助が助手を連れて訪れ，ていねいに遺体の清拭をした。その顔は赤みがさして，まるで生きているかのようであり，肉体は強健そのものにみえた，と小池は記している。

翌日の納棺は数人の友人の手によりおこなわれた。夫人は，「いまは心臓も固まってしまったのか，涙さえ出ません。独りになって泣けるだけ泣けたなら，どんなに心が安まることか」と，か細い声で言い漏らした[73]。黒布の掛けられた棺以外に，何も飾るもののない寂しさに，熊谷が口火を切って青木との連名で花環を用意した。夫人も少しだけホッとしたようであった。娘婿のフォークトの仙台到着を待って火葬の手続きをした。ヴュルフェルの希望通り，牧師を呼ぶこともなく，友人ひとりが生前の愛句を朗唱し，棺を送り出すと，ケーベルのときと同様の簡素な葬儀が終わった[74]。後日，夫人は遺骨を入れた骨壺に銅製の化粧箱を造らせ，そしてこれを胸に抱いて，祖国に持ち帰り埋葬すべく仙台駅を発った。ヴュルフェルの遺骨は，フランクフルトに近い，フリードリヒスドルフ（Friedrichsdorf）という小さな町で，永遠の眠りについたという[75]。享年 55 歳であった。

エルツェーレンのとき，「東京は大へんいい所です」と言ったら先生は，「否々，私は東京よりも何処よりも仙台がいちばん好きです」と答えられた温顔が，この静かな杜の都の山河と入り交じって思い出の中に生きている[76]。

2. ヴュルフェル文庫について　his book-collection

（1）成り立ち　origins

ゲオルク・ヴュルフェルの生涯は，如上のごとくであった。さて，ヴュルフェル文庫はその遺文庫とされている図書の一群であるが，その蔵書が死後どのように取り扱われたかをしめす記述文書は見つかっていない。したがって，ここで利用できる資料は，東北大学附属図書館における受入れ原簿と，図書に捺印されたスタンプ，その（原簿に対応する）登録番号，排架記号，そして図書への書き込み等の外観からわかることに限られており，以下の叙述はあくまでもそれらからの推定となる。

まず基本的な押捺について箇条書きする。

① 排架記号上部に「W」の朱印
② おもて見返し紙左に「旧第二高等学校図書」の楕円の朱印
③ この朱印のなかに登録番号，年月日，登録をおこなった館の名称等
④ 見返し紙右に「Würfel 文庫」の藍色の捺印
⑤ 標題紙（タイトルページ）に「第弐高等学校図書印」の朱印

ヴュルフェルの所蔵した蔵書は，かれに跡継ぎがなく，夫人もまもなく日本をあとにしたことから，生前に友人や知人に譲渡していたものをのぞいて，譲渡ま

72　小池，上掲書，216 頁
73　木村，上掲書，40 頁
74　この葬儀とは別に，二高でも 1 月 22 日にヴュルフェルの追悼式をおこない（読売新聞 1936 年 1 月 20 日第 7 面に告知された。ただしこれは電話取材であったためか，ヴュルフェルの名前は「ウイルヘール」となっている），フォークトがその席上で弔辞を読み上げた（註 14 参照）。また，その 2 か月後には同窓生と二高生を中心とした追悼集が刊行された。本稿でおもな資料とした『尚志会雑誌』（第二高等学校尚志会）第 162 号（Zum Andenken an Herrn Prof. G. Würfel）がそれである。
75　上掲『天は東北山高く』，80 頁。その他，小池堅治「ウュルフェルの墓」『新時代』2 月號，新時代社，1939 年，桂重鴻「ウュルフェル先生の墓に詣でる」『遍歴』侶仁会，1960 年参照。
76　青野，上掲書，60 頁

たは売却というかたちで二高に引き取られたと考えられる。大半の図書の標題紙（タイトルページ）には大きく「第弐高等学校図書印」の朱印があり，おもて見返し紙には「旧第二高等学校図書」と捺印されている。（図 4）このことから，二高での受け入れと，その後の東北大学への受け入れは明白である。登録（原簿）番号は 1 から 1160 までであり，1,160 冊であったことがわかる。ただし，これは二高の新制東北大学への包摂，すなわち 1949 年（昭和 24）以後の段階での冊数であることに留意すべきである。

また，すでに述べたように，生前ヴュルフェルは第一次大戦後のドイツ救済資金を捻出するために蔵書約 500 冊を売却したと証言されている[77]。そのため，この 1,160 冊が，かつてかれが所蔵していた図書の全体でないことは言うまでもない。それ以外にも，知人に贈与した書籍などがあった。木村謹治は 1935 年（昭和 10）12 月に，ヴュルフェルが愛蔵していたハンス・トーマ（Hans Thoma）の画集を贈られたとしている[78]。

見返し紙の捺印には，図書の登録作業の年月日も記載されており，それによれば，1964 年（昭和 39）1 月 29 日から同年 6 月 10 日までの約半年間に継続的に登録作業がおこなわれたようである。しかしこれは「旧第二高等学校図書」として登録された年代であり，二高図書としてではない。周知のように，1964 年は附属図書館教養部分館成立の年である。図書の登録作業は，おもに，この教養部分館においておこなわれたと推定される[79]。同じく見返し紙にある「Würfel 文庫」という藍色の捺印も，この登録作業にともなって付されたのだろう。（図 5）

いっぽうで，ヴュルフェル文庫の蔵書には，他の第二高等学校図書に見られるような，排架記号等をしめす「整理票」の貼付がない。ただ 1 冊のみ，この整理票が貼付された図書を発見したが，これは白紙の台紙であった[80]。（図 6）これらの事実から推測されるのは，ヴュルフェル文庫は，教養部分館において登録されるより前には，分類・排架されていなかったのではないかということである。

ここで教養部分館の成立史について簡潔に触れてお

図 4　見返しの「旧第二高等学校図書」印

図 5　Würfel 文庫の押印

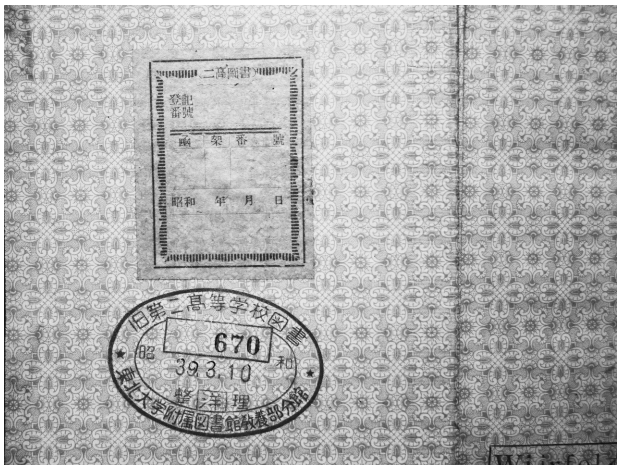


図 6　二高図書整理票の台紙

77　註 50 参照
78　木村，上掲書，39 頁。Hans Thoma（1839 －1924）はドイツの自然主義派の画家であり，写実的な風景画，戸外の人物画等で知られる。
79　一部は，川内分校分館において登録されている。
80　整理票台紙は，（948/12）John Brinckmans Sämtliche Werke in fünf Teilen / mit Einleitungen und Anmerkungen herausgegeben von Otto Weltzien, Hesse & Becker, [19??] に貼付されている。上記（　）内は配架記号をしめす。以下同じ。

きたい。教養部分館は旧制二高系統の第一教養部図書掛，仙台高等工業学校系統の第二教養部図書掛，そして宮城県女子専門学校系統の第三教養部図書掛の 3 つの系統からなるが，第一教養部図書掛が 1952 年（昭和 27）に第三教養部図書掛を，さらに 1957 年（昭和 32）に第二教養部図書掛を合併して富沢分校分館となり，これが翌 1958 年の，富沢分校の川内地区移転により川内分校分館に改称され，1964 年（昭和 39）の川内分校の教養部への発展的解消にともなって教養部分館となった。そして 1972 年（昭和 47）には附属図書館本館の川内地区への移転により，教養部分館は本館に統合され，その歴史に終止符を打った [81]。

ヴュルフェル文庫はこのようにして本館に受け継がれ，現在にいたるのだが，ここでは旧制二高系統の図書が問題となる。他の大半の旧制二高図書は本館では旧教養分類として排架されており，それらにおいては二高での「函架番號」が廃されて，新たな排架記号があたえられている。ヴュルフェル文庫にそのような形跡がないということは，二高においても，またその後も，東北大学教養部分館にいたるまで，同文庫は一般の図書とは別に扱われ，閲覧・貸し出しに制限が加えられていたということになるのではないか。また，1 冊のみ整理票の台紙を貼付されていたことから，二高では，登録作業直前に制止がはいったとも考えられる。

以上を要約すれば，ヴュルフェルの旧蔵書は，二高に受け入れられた後も一括して閉架扱いか，もしくは図書室等ではないところで個別に保存・管理され，貸し出し等の利用は許容されていなかったのであろう。なんとなれば，登録・分類されなければ，外部から蔵書の存在はまったく感知することができないからである。そうした保管方法は，二高が東北大学に包摂され旧蔵書が受け継がれた後にも継続され，ようやく教養部分館の成立直前になって，他の図書と同じように登録と分類が開始されたのである。さらに，このとき「Würfel 文庫」の捺印をして一般の図書と区別したことで，のちに分館が統合されることになった附属図書館の本館に所蔵されていた，他の令名ある個人文庫と同列におかれることになったのであろう。

かくて，現在のヴュルフェル文庫が成立した。残念ながら，1936 年（昭和 11）のヴュルフェルの死没から 1949 年（昭和 24）の旧制二高包摂までの 13 年間の歴史は，二高において保管されていたこと以外は完全に空白である。しかし，その劃期を教養部分館での登録，すなわち 1964 年におくことに異存はないだろう。

（2）　傾向　tendency

以上で全体としてのヴュルフェル文庫の成立を確認したので，つぎに蔵書の傾向をみておきたい。分類は日本十進法分類（NDC）にもとづいており，それによれば，（00）総記 42 冊，（10）哲学 99 冊，（20）歴史 128 冊，（30）社会科学 199 冊，（40）自然科学 63 冊，（50）技術・工学 5 冊，（60）産業 17 冊，（70）芸術・美術 43 冊，（80）言語 65 冊，（90）文学 491 冊となっており，文学関係の図書が，冊数としては最多，全体のおよそ 4 割を占めている。これに続くのが社会科学，歴史，哲学である。また，語学書は自然科学書とほぼ同数で，技術・工学書はごくわずかしかない。表 1 をしめす。

表 1　ヴュルフェル文庫の蔵書分類および冊数

00 総記	42 冊
10 哲学	99
20 歴史	128
30 社会科学	199
40 自然科学	63
50 技術・工学	5
60 産業	17
70 芸術・美術	43
80 言語	65
90 文学	491

これらの図書の言語は，ドイツ語が 1,032 冊と圧倒的多数を占めている。これは全体の 9 割に近い。英語がこれに続き 115 冊，フランス語は 5 冊である。

以上の傾向によりヴュルフェル文庫を特徴づけるとすれば，ドイツ（語）文学書を中心として構成された文庫であるといえよう。ただし，西洋史研究をなりわいとする筆者の感想としては，文学書につづく社会科学，歴史，哲学関係の文献は，その関心の広がりからすれば一体のものとして捉えられる。この 3 分野を合

81　東北大学百年史編集委員会『東北大學百年史　四』（部局史一）2003 年，「第三編　附属図書館　第九章　教養部分館」165－168 頁

表 2　ヴュルフェル文庫の蔵書出版年代および冊数

1770 年代	1 冊
1830	1
1840	1
1860	1
1870	6
1880	23
1890	41
1900	239
1910	238
1920	315
1930	139

計すると 426 冊となる。他方で文学書は，冊数では 4 割を占めているとはいえ，全集のかたちで収められているものも散見されることから，タイトル数からみると，歴史を含めた広い意味での社会科学に強い関心をもった文庫であるともいえるだろう。

さらに，これらの図書の出版年代は，表 2 のように 1770 年代から 1930 年代までと長期にわたっているが，ほとんどのボリュームは1900年代から1930年代にある。

これは 1880 年生まれのヴュルフェル自身のおよそ青年期から壮年期までに合致しており，その意味では，文庫はヴュルフェルとほぼ同時代に刊行された図書を中心としている。ちなみに，1770 年代の図書は，ドイツ啓蒙主義期の代表的な作家ラーベナー（Gottlieb Wilhelm Rabener，1714－1777）の『風刺集』第 10 版（1771 年刊）であり（図 7），つぎに，1830 年代の図書は古代ギリシアの軍人・哲学者であるクセノポンの『アナバシス』ラテン語版（1839 年刊），また，1840 年代の図書は，ドイツの劇作家ハインリヒ・フォン・クライスト（Heinrich von Kleist，1777－1811）の『生涯と書簡』（1848 年刊）である [82]。

ところで，前章においても何度か引用した小池堅治は，ヴュルフェルの読書傾向について，「先生の読書範囲は広汎にわたる。しばらく現代ものにかぎってみても……モーパッサン，アナトール・フランス，……イプセン，ビョルソンは二昔も前に卒業しておられ，近時ハムスン集の渉猟に忙しい」などと述べている。以下，少し長いが引用する [83]。

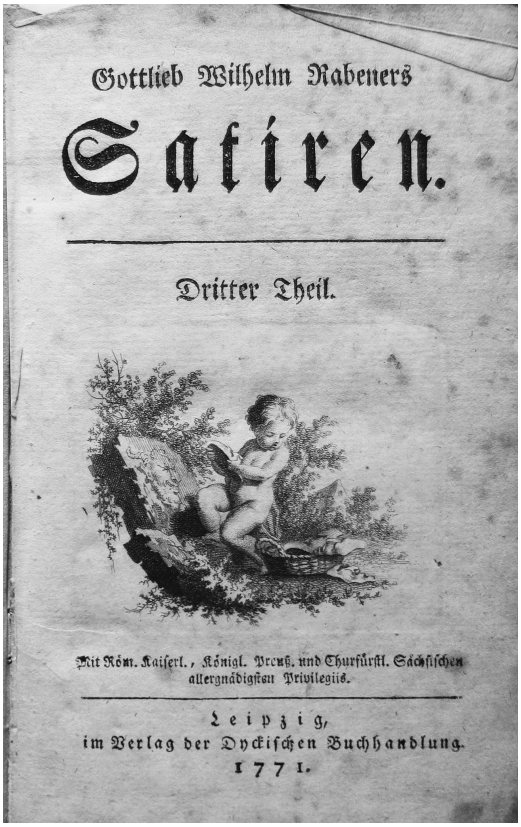

Gottlieb Wilhelm Rabeners
Satiren.
Dritter Theil.
Mit Röm. Kaiserl., Königl. Preuß. und Churfürstl. Sächsischen allergnädigsten Privilegiis.
Leipzig,
im Verlag der Dyckischen Buchhandlung.
1771.

図 7　ラーベナー『風刺集』（1771 年刊）

ドイツ現代もので先生の推奨してやまない作家は，レーンス（動物心理にくわしい），ヤコブ・ボスハルト，ハンス・グリム（『土地なき民』の著者），フリッヒガンゲルン，パウル・エルンスト，コルベンハイヤー，ヨゼフ・ヴァインヘーバー，シュミット・ネル，エルンスト・ヴィーヘルト等々でその代表作を読破しておられる。少し古いところではマイヤー，ラーベ，シュトルム，ケツラ，いわゆる美的写実派の畑のものの愛読者である。歴史小説，風刺文学（ブッシュ）にも関心が少なくない。詩としては最近ティム・クレーガーの『抒情詩区』，ヴァインヘーバーの『貴族と趣味』を語られる。

これらのうち，すでに「卒業」したという作家の作品はのぞいて，ハムスン（Knut Hamsun）の著作は 3 冊 [84]，レーンス（Hermann Löns）の著作も同じく 3 冊 [85]，パウル・エルンスト（Paul Ernst）は 2 冊 [86]，コルベンハイヤー（Erwin Guido Kolbenheyer）は 5 冊 [87]，

82　（947/1）Gottlieb Wilhelm Rabeners Satiren. 10. Aufl., Dykischen Buchhandlung, 1771.（991/1）Xenophontis Expeditio Cyri, Sumptibus Librariae Scholarum Regiae, 1839.（940/27）Eduard von Bülow (hg.), Heinrich von Kleist's Leben und Briefe, W. Besser, 1848.
83　小池，上掲『紅毛人交游帖』，196－197 頁。一部の表記を改めた。
84　Knut Hamsun,（943/20）Die Stadt Segelfoß. Roman, A. Langen, 1916.（949/4）Benoni, A.A. Knopf, 1925.（943/56）Das letzte Kapitel. Roman, Vollständige Ausg., Th. Knaur Nachf., 1928.

ヴァインヘーバー（Josef Weinheber）は 2 冊（ちなみに「貴族と趣味」ではなく『貴族と没落』Adel und Untergang である）[88]，ヴィーヘルト（Ernst Wiechert）は 1 冊 [89]，ラーベ（Wilhelm Raabe）はその評伝等を含めて 8 冊 [90]，マイヤー（Gustav Mayer）は 1 冊 [91]，シュトルム（Theodor Storm）は 3 冊 [92]，ブッシュ（Wilhelm Busch）は 9 冊 [93]，クレーガー（Timm Kröger）は 6 冊 [94] あり，これらの合計は 44 冊となる。他方，推奨してやまないという作家の，ほとんど筆頭に挙げられていたボスハルト（Jokob Bosshart）やハンス・グリム（Hans Grimm）などは所蔵されていない。「渉猟」というには少なすぎるものもあるが，概ね，小池の語るヴュルフェルの読書傾向と一致しているようにおもわれる。

以上は文学関係であったが，小池はさらに，「伝記や回顧録は小説に次ぎ先生の寵を恣（ほしいまま）にしているようにみえる」とも指摘している。この指摘もまた当を得ているといえる。とくに目につくのが，ナポレオン関係の自伝や評伝であり，それらは 18 冊にもおよんでいる。また，宰相ビスマルクや皇帝ヴィルヘルム二世，またフリードリヒ二世の伝記なども所蔵されている [95]。

また，プロイセンの軍人モルトケ（Helmut Karl Ferdinand von Moltke）の手記・書簡集が 1 冊，そして，ヒンデンブルクやヒトラーに関係する図書もそれぞれ 3 冊ずつ所蔵されている [96]。これらの伝記や回顧録は，戦争と支配に大きくかかわるものである。言うまでもなく当時は日本でも国家財政に占める軍事費の比率が平均して 4 割，多いときは 6 割を超えていたため [97]，軍事と政治・社会とは不即不離の関係にあった。もちろん，ヨーロッパ列強国も同様であった。これらは，たんなる文学趣味にとどまらぬ，ヴュルフェルのドイツ近現代史への関心，そしてそこからまさに胎動しつつあるものへの関心を証明するものといえよう。

その他，日本関係の図書も人名辞典（Who's who）から独和辞典，旅行ガイド，こよみ，会話帳，歴史書，地理書，文学論，軍事論，絵画・版画論，寓話，また，1923 年（大正 12）の関東大震災のレポートまで幅広く 42 冊が所蔵されている [98]。小池は，「長くいるほど知ったかぶりができなくなる」とヴュルフェルがつねづね口にしていた，と述懐している [99]。これらの図書は，その刊年から判断すれば，滞在中ではなく，来日以前の予備知識習得のために入手したものも含まれているかもしれない。

85　Hermann Löns,（943/13）Mümmelmann. Ein Tierbuch, A. Sponholtz, 1922.（943/29）Wasserjungfern. Geschichten von Sommerboten und Sonnenkündern. 17. Aufl., R. Voigfländers Verlag, [19??].（943/33）Das zweite Gesicht. eine Liebesgeschichte, Eugen Diederichs, 1922.

86　Paul Ernst,（940/42）Gedenkbuch, E. Avenarius, 1933.（941/7）Beten und Arbeiten. Gedichte, Georg Müller, [19??].

87　（941/4）E.G. Kolbenheyer, Lyrisches Brevier, G. Müller, 1932. Usw...

88　（941/9）Josef Weinheber, Adel und Untergang, Adolf Luser Verlag, 1934. Usw...

89　（942/13）Ernst Wiechert, Das Spiel vom deutschen Bettelmann, A. Langen : G. Müller, 1933.

90　（940/44）Fritz Hartmann, Wilhelm Raabe. Wie er war und wie er dachte. Gedanken und Erinnerungen, 2. durchges. und verm. Aufl., A. Sponholtz, 1927. Usw...

91　（288/2/3）Eduard Vehse, Gustav Mayer (hg.), Süddeutsche Fürstenhöfe, G. Braun, 1921.

92　（945/4/1, 945/4/2）Georg J. Plotke (hg.), Der Briefwechsel zwischen Paul Heyse und Theodor Storm, Bd. 1, Bd. 2., Lehmann, 1917-1918. Usw...

93　（941/31）Wilhelm Busch, Zu guter Letzt, Fr. Bassermann, 1904. Usw...

94　（943/35/1）Timm Kröger, Eine stille Welt. Novellen, Gesamtausgabe, G. Westermann, [1913]. Usw...

95　（235/3/1）Meine ersten Siege (Napoleons Leben / von Ihm Selbst übersetzt und herausgegeben von Heinrich Conrad), 4. Aufl., R. Lutz, [1910]. Usw...（234/7/1）Erich Marcks, Bismarcks Jugend, J.G. Cotta, 1909.（234/14）Ernst Westphal, Bismarck als Gutsherr, Koehler, 1922.（234/6）Kaiser Wilhelm II., Ereignisse und Gestalten aus den Jahren, 1878-1918, K.F. Koehler, 1922.（234/8）Freiherr v. d. Goltz, Kaiser Wilhelm II. und das Vaterland, Velhagen & Klasing, 1913.（234/20）Wolfram von den Steine, Staatsbriefe Kaiser Friedrichs des Zweiten, Ferdinand Hirt, 1923.

96　（392/7）Auswahl und Verbindungen von Peter Kurz, Moltke. Aufzeichnungen, Briefe, Schriften, Reden mit Zeichnungen aus Moltkes Skizzenbuch, W. Langewiesche-Brandt, 1923.（392/4）Generalfeldmarschall von Hindenburg, aus meinem Leben, S. Hirzel, 1920.（311/7）Wilhelm Bockelmann, Von Marx zu Hitler, Franz Eher Nachfolger, [vorw. 1933].（312/10）Adolf Hitler, Mein Kampf, Bd.1, Franz Eher Nachfolfer, 1933. Usw...

97　一例として 1935 年（昭和 10）の我が国の軍事費の国家財政に占める比率は 47.1 パーセントであった。「帝国書院，統計資料　歴史統計　軍事費（第一期～昭和 20 年）」，下記サイト参照。
https://www.teikokushoin.co.jp/statistics/history_civics/index05.html

98　（210/6）The great earthquake of September 1st 1923. A record from the reports of the "Japan chronicle" of the destruction of Yokohama and Tokyo and the other ravages wrought, Japan Chronicle Office, 1923.

99　小池，上掲書，194－195 頁

（3）特徴　features

ヴュルフェルが生前手放したという約500冊の蔵書を度外視して，以上の蔵書の傾向が自身の集書傾向に一致しているとすれば，かれは同時代の文学関係，そして社会科学関係の図書を集めながら，文学については，決して体系的ではなかったが，写実主義的な傾向を好み，とくに関心のある著作にかんしては，生まれる50年前，あるいは100年前に刊行された図書までも買い求めたのであろう。他方，現代政治についても，これにかかわる支配者，政治家の伝記や回顧録を中心に，文学におけるのと同じく，他者の導きなどはなしに，自身の自由な思索にしたがって，まさしく読み耽っていた，といえるのではないだろうか。

もちろん，旧蔵書とは本人が買い求めたものだけで構成されているわけではない。文庫のなかでヴュルフェルの自署のあるものは確認される限りで38冊，何らかの署名があるものは16冊，その他書き込みのあるものは28冊で，全部合わせても82冊と，全体の7パーセントにすぎない。（図8）自署は，その少なさから推測するに，おそらく備忘のため，あるいは誰かに一時的に貸し出すような場合の「名札」にすぎず，ヴュルフェル自身は物理的な図書の所有権（Ex libris）を，特段に主張するようなことはなかったのだろう。

書き込みから推定されることがらとして，献呈，または贈与されたとおもわれる図書を挙げておこう。まだ十分な探索をおこなったわけではないが，ウォルター・デニング（Walter Dening）のModern Japanese literature（「現代日本文学」）には，見返し紙に著者からの献呈辞が記されており，1913年10月19日付けとなっている[100]。デニングは同年，仙台で死去している。また，ヘルマン・カイザーリング（Hermann Keyserling）のDas Reisetagebuch eines Philosophen（「哲学者の旅日記」）には，1924年1月19日付けの献辞がドイツ語で記されており，おそらく登張信一郎からのものである[101]。登張は，二高でのかつての教え子であった。仙台でヴュルフェル夫妻のもてなしを受けたというハンス・モーリッシュの著書Populäre biologische Vorträge（『一般生物学講義』）第2版（1922年刊）も所蔵されており，その標題紙には，「Herrn Prof. G. Wuerfel in aufrichtigen Freundschaft der Verf [asser].」（ヴュルフェル教授に心からの友情のしるしとして，著者）と記されている[102]。（図9）

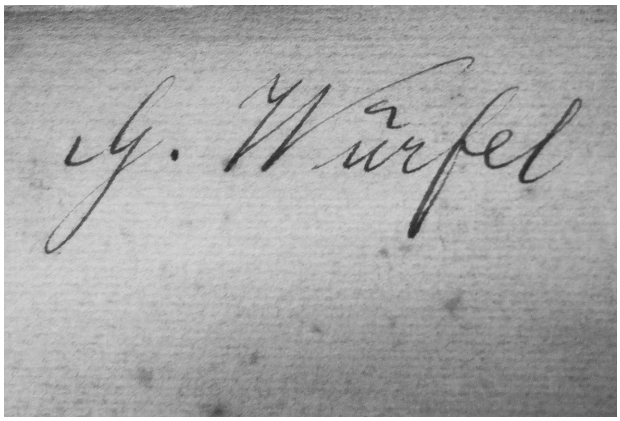


図8　ヴュルフェル自署

また，親類とおもわれる人物から贈られた図書もあった。これは，「Dr. Kurt Würfel」と「Erich Würfel」からの2種があり，ヴュルフェルがドイツに住む弟の生活を支援していたという証言を考慮すれば，弟は2人いたのではないかと推測される。前者では戦時中の記録文学などが，後者では劇作家フリードリヒ・ヘッベル（Friedrich Hebbel）の書簡集などが見られる[103]。それぞれの関心にもとづいて贈り物としたのだろうか。それとも，たがいの交信のなかから決めていったのだろうか。いずれにしても，このような書き込みの調査が進展すれば，ヴュルフェルの新しい側面が浮かび上がってくる可能性は高い。

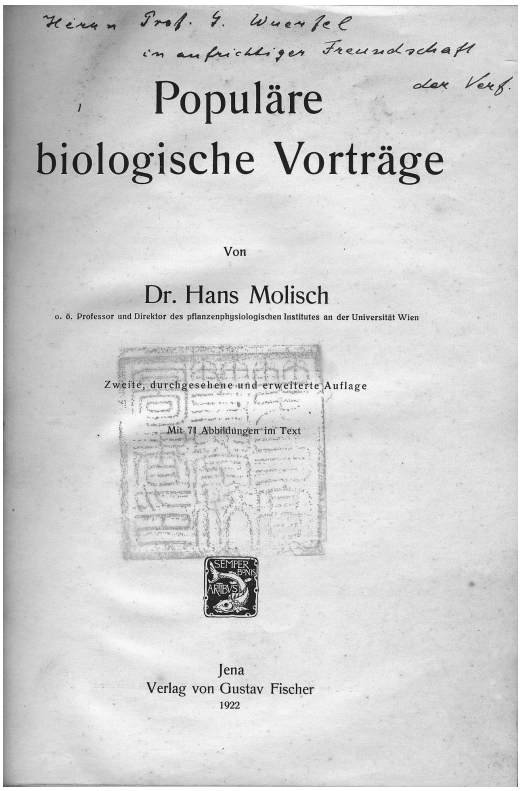
100 （050）Walter Dening, Modern Japanese literature, [1913].　デニングの著書はこれ以外にも（210/5/1, 2）The life of Toyotomi Hideyoshi, Yurakusha, 1906が所蔵されている。
101 （110/4/1, 2）Graf Hermann Keyserling, Das Reisetagebuch eines Philosophen, 6. Aufl., O. Reichl, 1922.
102 （460/1）Hans Molisch, Populäre biologische Vorträge, 2. durchgesehene und erw. Aufl., Fischer, 1922.
103 （234/4）Erich Ludendorff, Meine Kriegserinnerungen, 1914-1918, Mittler, 1919.（393/1）Erich v. Falkenhayn, Die oberste Heeresleitung 1914-1916, Mittler, 1920.（948/12）Otto Weltzien (hg.), John Brinckmans Sämtliche Werke in fünf Teilen, Hesse & Becker, [19??].（945/9）Friedrich Hebbel, Tagebücher und Briefe, [1???]. (Deutsche Bibliothek ; [Bd. 41]). Usw...

おわりに　coda

本稿の課題は，ヴュルフェルのよりくわしい経歴をあきらかにしながら，その人物像を掘り下げ，そこからヴュルフェル文庫の性格を見極めることにあった。これを十全に成し遂げることができたかどうかについては甚だ心もとないが，いちおうの成果にもとづいて以下にこれをまとめておきたい。

ヴュルフェルは，1880 年 9 月 14 日，アンハルト公国のツェルプストという町で生まれた。それはかつてアンハルト＝ツェルプスト候の宮廷がおかれた城下町であり，アンハルト公国は周りをプロイセン王国に囲まれ，当時はドイツ帝国の構成国の一つであった。両親や幼少期についてはつまびらかでない。少なくとも 2 人の弟がいたようである。ギムナジウムを卒業後，テュービンゲン，ベルリン，ハレ，マールブルクの各大学で神学と哲学を学び，1905 年に牧師の資格を得た。同年，普及福音新教伝道会の宣教師として東京小石川の新教神学校勤務を命じられ，翌 1906 年（明治 39）4 月，27 歳のときに来日。ラファエル・フォン・ケーベルと交流し，その人格に共鳴するとともに，教会にたいする自由な思想においてはケーベルに影響をあたえた。従来の伝道のあり方に納得せず，以後，牧師としての教職から遠ざかって早稲田大学のドイツ語教師などをつとめたが，1908 年（明治 41）9 月より仙台の旧制第二高等学校（二高）にドイツ語・ラテン語教師として着任し，その後の生涯を生徒の教育のために捧げた。二高では，答案のドイツ語に一箇所でも誤りがあると，その箇所を 5 回書き直させ，これを誤りがなくなるまで繰り返させるという，きわめて厳しい（と生徒の眼には映った）授業法をとったことから，フュンフマールの異名で呼ばれたが，授業中も冗談を飛ばしたり，物まねをしたりと，生徒をおおいに笑わせることもあった。あらゆる言語のなかでもドイツ語は表現力に富み，柔軟で強靱で哲学的思索や詩作にもっとも適していると信じていた。

健脚でならし，仙台郊外をよく散歩した。台ノ原の風景をとくに好んだ。同僚たちとは馬術や弓術を，冬にはスケートを楽しんだ。生徒の訪問や連れ立っての遊山も歓迎し，何にでも純粋に，ときになりふり構わず取り組むようすから，生来の野人と評されたこともあった。親しい友人も多かったが，几帳面で一途な性格から，思わぬ軋轢を生むこともあった。


Herrn Prof. G. Wuerfel
in aufrichtiger Freundschaft
der Verf.

Populäre
biologische Vorträge

Von

Dr. Hans Molisch
o. ö. Professor und Direktor des pflanzenphysiologischen Institutes an der Universität Wien

Zweite, durchgesehene und erweiterte Auflage

Mit 71 Abbildungen im Text

Jena
Verlag von Gustav Fischer
1922

図 9　モーリッシュからの献呈本

1912 年（大正元），31 歳のときにドイツ人女性と結婚。16 歳の連れ子の娘も可愛がり，他人も羨むほどの仲睦まじい夫婦，親娘となって幸せな家庭を築いたが，娘は事業家と結婚後，病気のため夭逝した。

第一次世界大戦のさなかには敵性外国人として警察に監視され，地所家屋の財産を一時的に没収されるなど苦労を重ねた。しかしながら，ドイツ人捕虜や祖国ドイツの戦争遺児の支援のために俸給や貯蓄の大半を費やすなど力を尽くし，戦後もそれを続けた。このとき資金を得るために，蔵書約 500 冊も売却してしまったという。

壮年期にはそれまでの授業の厳しさが少し和らぎ，フュンフマールの異名よりも親しみを込めて「ウュル公」とあだ名されるようになった。

1936 年（昭和 11）1 月 18 日，雪晴れの朝に徒歩で通勤し，1 時限目の授業中，心臓発作を起こして，処置もむなしく帰らぬ人となった。生徒の冬休みの課題であった「語り聞かせ」の一つが終わったところであり，その最後の言葉は，「Schön!（素晴らしい）」であった。葬儀は本人の希望通り牧師をたてず家族と友人たちの数

人ですませ，二高ではこれとは別に追悼会を催した。遺骨は，夫人によりドイツの小都市フリードリヒスドルフに埋葬された。満 55 歳没。

旧蔵書は二高に譲渡され，1949 年（昭和 24）の新制東北大学への包摂により，「ヴュルフェル文庫」として同大学附属図書館に受け継がれた。1964 年（昭和 39）に登録･分類された。全 1,160 冊。文学書および，哲学・歴史・社会科学関係書が半数ずつ，約 8 割を占める。読書傾向を反映して，コルベンハイヤーなど同時代の写実主義の作家の著書が多く，書簡集，伝記・回顧録も多数備える。ナポレオンやドイツ皇帝伝など，近現代史への強い関心もうかがわせる。書き込み等は全体の 1 割に満たないが，教え子や知人，またハンス・モーリッシュからの献呈本などを見つけることができる。おそらくは 2 人の弟から贈られた図書もあり，本格的な調査が俟たれる。

謝辞　acknowledgement

本稿の資料調査では東北大学史料館の高橋早苗さん，同附属図書館本館図書情報係長関戸麻衣さん，同学術情報基盤係長檜原啓一さんのお世話になりました。また，東北学院大学フリーダー・ゾンダーマン教授には実名調査のさいのご意見とあわせて，蔵書リストにも目を通していただきました。記してお礼申し上げます。

（おがわ　ともゆき，学術資源研究公開センター助教・附属図書館協力研究員）